



## サイレント・リーグ

校長 森賀 慎一

新年あけましておめでとうございます。令和4年  
がスタートしました。「壬寅」の年は、「何事にも好  
奇心をもってポジティブに進めば、華々しい成果が  
期待できる、希望にあふれる年になる」という解釈  
があるようです。杉三小にかかわる全ての皆様にと  
って、良い一年になりますことを願っています。

いよいよ3学期が始まり、子どもたちの元気な  
姿が学校に戻って来ました。今年も引き続きよろし  
くお願いいたします。

3学期は1月に研究発表会、2~3月に5・6年  
生の富士学園移動教室と大きな行事等が行われる  
予定です。新型コロナウイルスの感染症予防に気を  
配りながら、充実した3学期になりますよう学校教  
育へのご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、表題の「サイレント・リーグ」ですが、新  
聞のほんの片隅にあった小さな記事として紹介さ  
れていたものです。愛知県岡崎市で行われた市内の  
12の公立中学校で開催された、小さなサッカー大  
会のことでした。このサッカー大会には3つのルー  
ルがあります。

- ①指導者は指示を出さない。
- ②ウォーミングアップ、メンバー選定、メンバー交  
代は生徒が行う。
- ③各校は、部員全員が納得できる出場時間や役割を  
考える。

簡単に言うと、「大人は黙ろう。子どもの主体性  
を引き出そう。」という趣旨のようでした。ハーフ  
タイムの中学生の様子を観ていると、「どうしたら  
よかった?」「相手にパスを回させて、寄せよう」  
「練習試合なんだから、間違っていないから」等の会  
話が聞こえて来たそうです。試合後に生徒たちの感  
想を聞くと、「『自立』が勝利に向けても大事だと感  
じました。」「普段、細かいところまで先生に任せ  
ているから、本来の力が出せないのどと感じました。」  
との反応があったそうです。指導者たちはと言うと、  
「自分は前に出てしまいがちなので、こういう機会  
に新しい指導感が生まれるかもしれません」「生徒  
には、『先生に従った方が楽』という面と、自分で  
決める不安があると思います。そこから解き放たれ、  
自分で決める楽しさを体験すれば自信につながる」

という感想が聞かれたそうです。

この中学生のサッカーの事例を知り、皆さんはど  
のような感想をもたれるでしょうか。私は自分が子  
どもの頃からサッカーをやってきて、今も杉並区  
のシニア大会に参加しています。子どもの頃を思い返  
すと、ベンチからの指示を気にしながらのプレーが  
多かったような気がしています。でも大学生になっ  
て部活ではなくなった時には、自分で自由にプレー  
をしてより楽しかった思いがあります。ただ、それ  
はそこまでのプレー経験があって、自分で考える力  
が身に付いていたからとも感じています。

このことから言えるのは、

- ①子どもたちに任せる場面をできるだけ多く作り、  
自分で考える経験をさせること。
- ②任せる以上失敗も含めて良い経験と考え、あまり  
口出ししないこと。

この2つに加えて、「終わった後に良かったことと  
改善すべきことしっかりと振り返ること」も大切で  
はないかと考えます。

杉三小では、ここで紹介したような考え方を教育  
活動の様々なところに取り入れています。その中心  
になるのが各教科等の授業です。

- 学習課題を自分で選んだり、決めたりすること
- 課題の追究の仕方を自分で選ぶこと
- 必要に応じて友達と自由に相談すること
- 先生は子どもたちの様子を観ながら必要に応じ  
て支援すること

当然ながら子どもたちの発達段階によって、何を  
どの程度子どもたちに任せるのか、子どもたちが自  
分で考えるための仕掛けづくりは、教師の腕の見せ  
所です。その根底にあるのは、「子どもたちの力を  
信じ、学びの主体を子どもたちに渡そう」という考  
え方です。杉三小の教職員は、実際に授業を計画・  
実施するときに、それが簡単でないことを感じなが  
らも試行錯誤を繰り返しています。

1月21日(金)には、その取組の一端を区内外  
の先生方に発表します。杉三小の子どもたちが主体  
的に学習に取り組み、生き生きと学びに浸っている  
姿が見られることを期待しています。